



ソロモン諸島の「公平」さ

田中 求 (たなか もとむ)

東京大学大学院農学生命科学研究科

鍋や皿の声に聴いて

ソロモン諸島のビチエ村の人びとは割り算が苦手だ。足し算ならば指を使えば良い。足りなければ、ノットにたくさん線を引き、答えらしきものをひねり出す。ただし、割り算は大変だ。指を切りわけられるわけにはいかないし、葉っぱをちぎるのにも限界がある。でもビチエ村の人びとは、「公平」な分配が苦手なわけではない。

村人は焼畑、漁撈採集を生活の柱にし、収穫物をみなでわけ合うことが多い。カツなどがたくさん獲れると浜辺に鍋が並べられる。でも単純に魚と鍋の数を計算し、均等にわけていく、なんてことはない。

この鍋のもち主の家は食いしん坊の子どもがいるからこれくらいかな、ばあさんの好きなハラワタも入れとこう、この家は漁に出る人もいないし久しぶりの魚だろうから多めに入れといてあげよう、とか単なる計算では計れない要素によってわけられていく。鍋は単なる鍋ではない。そのもち主の性格や生活を語るのだ。調理物のやりとりも活発だ。調理小屋をもっていた一九世帯に対して、二〇〇二年八月二日から二七日までの他者への調理品などの贈与状況を調査したところ、贈与回数は計一三一回であった。一世帯平均で六・九回、調理品や収穫物の他者への贈与をおこなっていたことになる。食事どきになると、高床の階段をトコトコと他家の子どもが皿をもって上がっ

てくる。食事後、皿が台所に並ぶ。皿は語る。さあお返しをもつていくのだと。皿は溜まれば溜まるほど叫び声を高めていく。それは村人の、村で生活していくうえで、の良心にビキビキと響き、村人同士を繋げ、また縛っていく。その響き具合は、村のまとまり具合を示すのかもしれない。

お金の「輝き」に惑わされ

ビチエ村では何度か商業伐採がおこなわれ、伐採権料がもたらされた。伐採されたのは、みなで利用してきた森林だ。だから、各家の子どもの数、収入の有無と多寡、最近の経済的な事情などを考慮しつつ「公平」な分配が試みられた。しかし、伐採権料の着服が生じ、また分配金の少なさに不満をもつ者もいた。

お金はいろんな物に交換でき、またたくさんもつていても腐ってしまうこともない。増えれば増えるほど、多ければ多い

ほど良く、人の心に欲望に訴えかけ続ける。村で生活していくうえで、の良心の響きよりも、お金の輝きに魅せられてしまふ人もいる。お金はその「輝き」で村人の良心を覆い隠し、「公平」な分配をととても難しくするのだ。

なんでも単純な割り算で均等にわけることが「公平」なのではない。おそらくそれは人を単なる物と見て、皿を鍋を単なる入れ物と見る、思考停止の無機質な状態のなかでの「公平」なのだろう。そうでない社会では、そんなわけ方は「公平」からはほど遠いものになる。

みんなが共通の生活基盤をもち、人間臭くて、面倒臭くて、「良心の縛り」のある社会での「公平」は、皿や鍋の声を聞くことだろうか。知ることができるのかもしれない。そんな声を聞きとるため、またその声を響きにくくさせる「お金」とは何が、考えながらフィールドワークを続けていきたいと思う。



新年の料理をわける村人たち (2006年1月)

教科書を書き写す真剣さはすごいが、割り算は苦手だ (2005年8月)

